

「書評・紹介」

平安博物館考古学第2研究室

渡辺 誠編

「桑飼下遺跡発掘調査報告書」

この紹介文では、わたくしを含めて考古学になじみの薄い一般の地理研究者を対象とする形で書き進めることにする。まず私事について述べ、もっともたいせつな報告書の内容については最後という逆の順序である。

わたくしと「桑飼下遺跡」地域 昭和三四年七月、かねて自然堤防として目をつけていた、ここ由良川下流の桑飼下（京都府舞鶴市桑飼下）へ行った。由良川がゆるく蛇行し、その右岸に沿って、きわ立って高い自然堤防が連なっていた。歓喜であった。このときをきっかけに、昭和四八年までに一〇回以上この土地を訪ねたことになる。

ここでわたくしの心に特大の疑問が残った。それは自然堤防上の六六戸の全農家が明治四〇年の大水害で流失しており、家の礎石からそれはよくわかった。疑問というのは、このとき流失した集落が一体いつの時代に発生していたのかという点であった。そして全くの推測に過ぎないが、ずっと古い時代に発生し、その後、洪水で流失することを繰返しつつ明治に至ったろうと考えた。そのことは架空の推測とて、もちろんつぎの報告には書けなかった。籠瀬良明（一九六二） 京都府由良川下流谷平野 横浜市立大学紀要

そして本報告書によって、永年の疑義は解けたのである。

渡辺 誠助教授とわたくし 時は移った。しかし由良川、とくに

桑飼下の自然堤防はわたくしの脳裏から離れることがなかった。調査を縁で知った一人、この地の桑垣太一さんから、こんど建設省の手で由良川の自然堤防の半分を除去して、河幅を広げる工事を始めるとの手紙を受取ったときも飛んで行った。その後、さらに工事によって遺跡が発見され、学者の手で本格的な発掘が始まったとの知らせで、またまた飛んで行った。昭和四八年二月一日のことである。本報告書の発掘経過記事（一一―二〇頁）を読むと、その日は第一次発掘調査の開始（一月二十九日）直後だったことになる。

自然堤防上には、調査団のための板囲いの、そまつな小屋が建っており、わたくしはそこで黙々として発掘作業に従事している若い学者たちに接触できた。その日も日本海岸独特の冬空だったが、ここで受けた強烈な感激はいまも残っている。「地理」一八巻八号に書いたのはその時の記事である。

昨年拙著「自然堤防」を出版するに際しては、渡辺誠助教授の御好意で、第一、二次調査報告書と貴重な発掘現場写真を頂き、巻頭を飾ることができた。その渡辺さんからある日電話があり、「遠賀川の河畔の地形調査をしたことがないか、その記事はないか」とのこと。実は昭和四〇年前後に何回もそこを歩き、資料も多少集積しているのだが、まだ論文にはなっていないと答えたのだった。

さらに十二月に入ると再度の電話で、「自然堤防」を五冊急送せよとの有難い御下命を受けた。

自然堤防地形に注意を払う渡辺 誠助教授 そのようなことが重

なったので、渡辺助教授とその周囲の考古学者が、自然堤防を人間の生活舞台としてどのように考えているかは、わたくしにとって強い関心事となりはじめた。そして贈られた部厚いこの報告書を読み進むうち、いくつもの重要な記述にぶつかったのである。

たとえば「……自然堤防はすべて遺跡である、とさえ認識しても、決して事実から大きくかけ離れることはないであろうことを、強調しておきたい。」(三一二頁)というくだりである。

自然堤防を舞台とするのはなにもここ桑飼下だけでなく、由良川べりのほとんど全部の自然堤防がそうであることを、五万分一図に記入されている(六頁)だけでなく、西日本の各地の事例を数多くあげているのである。それは稲作に好都合な弥生時代の舞台であるだけではないことわったうえ、縄文時代の自然堤防遺跡をあげている。石川県犀川下流、豊川下流の自然堤防上、一宮市佐野、同馬見塚などの遺跡がそれであるという。近畿地方では京都市上烏羽、向日市石田川、桜井市大福、淀川右岸高槻市柱本、日高郡川辺町和佐なども自然堤防上の遺跡としてあげられている(三〇九～三一頁)さらに小出博(一九七〇)を引用して「西日本は一般的に河岸段丘や洪積台地が弱い(三〇九頁)」と述べた後、「河岸段丘等の好条件に恵まれないために、遺跡の立地条件として、自然堤防が重視されてくるのは、きわめて自然なことである(三〇九頁)」と指摘している。

縄文時代における自然堤防の生活条件

自然堤防は、弥生時代には、付随する後背湿地で水稻作が行なわれやすいから、よい生活舞台となることが多いにしても、縄文時代

も有利な舞台であったのはなぜか。渡辺助教授は「まず由良川は網漁の舞台である」と述べ、さらに「露出している粘土層は土器の胎土を供給……自然堤防上にはドングリ・クリ等の堅果類、根菜類の採集が行なわれ」由良川と後背湿地の水は鳥類を集めた。自然堤防斜面からの自然湧水は、冬季ドングリやトチの実のアク抜きに利用された。「後背湿地では、網漁の他に、毒流し漁が想定される。また秋にはヒシの実の採集が行なわれたであろう」といっている。そしてこのような生活を展開していた縄文後期村落の経済基盤の形態を、とくにゴシック文字で「桑飼下型経済類型」と命名しているのは興味深い。

「西南日本におけるこうした立地条件は、弥生時代になって水稻栽培を受容する際に、非常に受容し易い前提条件の一つを形成していたことになる」(三一七頁)という記述も注目をひく。

ここだけでなく、わたくしの目をみはらせる珠玉の記事は、全巻にみちているから、恐らく考古学者や古代史家に注目されているに相違ない。しかも下層から順次縄文、弥生、さらに「表土近くには中世・近世の遺構面も残存していた」ことから、本書はより広範な史学者にも魅力ある研究に相違ない。地理学者とくに平野地形の専攻者と歴史地理学者には必読の書のように思われる。

終りに本報告書の目次と調査班組織のあらましを列挙する。

目次概要 遺跡の位置と環境 二、発掘調査の経過 三、縄

文時代の遺構と遺物(炉址・埋甕・特殊粒土層・縄文土器・石器・石製品・土製品・木製品・動物遺体・植物種子・炭化材・花粉分析)

四、弥生時代以降の遺構と遺物(住居址・土墳・弥生式土器・

土師器・陶器・須恵器・鉄鍔・土製品・石製品）五、綜括（立地条件をめぐる諸問題・縄文後期集落の経済基盤・縄文農耕論への新しい視角）英文抄録 引用文献目録 図版

調査団 団長 角田文衛 調査主任 渡辺 誠 調査員 片岡肇・鈴木忠司・江谷寛・亀井節夫・那須孝悌・田中正昭、その他木村・山本・小池・川端・長谷川・山岸・山下・梅咲・上羽・飯田・西田などの若い学者が協力。江坂輝弥・賀川光夫・寺島孝・中道秋治・永松・平ノ内・下村諸氏も名をつらねるなど、龐大な組織でなされたのである。

以上は地理学の側というより、わたくしのインタレストである自然堤防のごく限られた視角からの紹介であり、極めて不備な記述に過ぎないことをおわびしつつ擲筆する。

本報告書は非売品であるが、発行所に伺ったところでは若干の余部があり、京都市中京区三条高倉平安物館経理課（〒六〇四 振替京都七七七）に申込みれば 定価六〇〇〇円送料三四〇円でおわけできるとのことである。B五版三四八頁 ほかにアート写真版七十二頁 一九七五年一月三十一日舞鶴市教育委員会発行

（龍 瀬 良 明）

山崎謹哉編著 地理教育の本質と実践

本書は専修大学の山崎謹哉教授を中心に、駒沢大学の中島義一助教授が協力した著述である。ほかに小学校教育を大角留吉（日大地理卒・戸塚一少）、奥藤恭弥（千葉大卒、東大研修・習志野二中）、

阿部和夫（岩手大卒・岩谷堂高）の三先生が実践面を分担した、書名のとおり「本質と実践」のすぐれた教科書である。

五名の編著者はいずれも、その道のベテランである上、評者もよく知っているので、文章が読みやすいことと相まって、アツというまに、全巻を読了してしまった。これなら、現場の先生はもちろん、他日現場へ出るために学部大学生が、教職課程のテキストまたは教材研究指針として使用しやすいに違いない。

本書の特色の第一は、地理教育とは何か、地理学との関係、小・中・高校での地理教育での本質と実際面はもとより、郷土学習から遠足のしかたにいたるまで、およそ地理教育の各方面を一通り、まんべんなく扱っている点である。これなら大学のテキストに好適であろう。

第二の特色は地理教育の実際のやり方を具体的に展開している点である。例えば小学校五年生、「日本の農業」を二八時間で行なう指導計画を、あるいは六年生「さばくと草原」の展開例を適切に示している。

同じ「日本の農業」は中学校ではどのように指導するか。これを日本経済の諸問題として、政経社分野で綿密に展開して見せてくれる。

高校では「オセアニアと南極大陸」の指導案では、その展開例がとくにすぐれている。

第三の特色は生徒指導の実践例を写真や地図を加えて、興味深く表現している点である。同じ傾向は山崎教授自身の撮影になる、住宅地と入組む野菜畑と芝生畑を示した都市域農業の景観写真にも見